師匠とＡＶ

霊〇〇隆、カレシとの初めて、全部みせちゃいます！　前編

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18759512

R-18, モ腐サイコ100, 芹霊, 本番無し

師匠が出演してるＡＶを見つけてしまった芹沢の芹霊すったもんだです。本番はありませんが、イチャイチャはしています。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

霊〇〇隆、カレシとの初めて、全部みせちゃいます！　前編

この世の終わりみたいな顔をしている霊幻さんに、俺は小さくため息をつく。
「……そんな顔するなら、なんでＡＶに出たりしたんです。顔バレのリスクめちゃくちゃ高いのに」
「……そんなもん、金のために決まってるだろ。それに、特殊な企画のゲイビデオだから、まずバレねーよ」
「近所のビデオ屋のゲイビデオのコーナーで、おすすめでめちゃくちゃ目立ってましたよ、霊幻さん」
「えええええ！？」
また真っ赤になる。忙しい人だ。
「うそだろ……何で本番も無いようなあんなビデオがおススメなんかに……」
「そりゃ抜けるからじゃないですか」
うわああ、と声を上げて頭を抱える霊幻さん。呆れた人だ。ＡＶに出るなら、そういうことも視野に入れておいた方が良かっただろうに。
「お金のために出演したのは、浅はかだったんじゃないですか」
どうしても責める口調になる。
「仕方ないだろ、依頼人に怪我させちまって、どうしても現金が足りなくなったんだからよ」
「怪我？」
「今思えば、当たり屋みたいな依頼人だったな……モブが張ってくれたバリアの外に出て、腕を折ったんだ。で、慰謝料と治療費を工面しなくちゃならなくなってな。同時に出張依頼の交通費の計算ミスったりして、赤字で傾きかけたんだよ、この相談所は。その時に昔のテレビ局の知り合いからＡＶの話を持ちかけられて、最初は断ったんだけど、有名人枠ってことで、本番無し絡み無しでイケる、って言われて、相談所の存亡と天秤にかけて、どうせバレる訳

のないＡＶに出た、ってわけだ」
「ははあ、なるほど……」
「ま、あの内容で５０万だったから、良心的ではあったなあ」
「ＡＶってそんなに貰えるんですか！？」
「人と会社によるとは思うがな」
「はー、勉強になるなぁ……」
「そうかそうか。じゃあこの話はもう終わりと言うことで」
「いや待ってくださいよ。もう１つの方をはぐらかさないで下さい。これ以上不誠実な返答をするのなら、影山くんに泣きつきますからね。ＡＶのこともバラします」
「怖いこと言うなよ！？不誠実だなんて、そんな」
霊幻さんは自分の頭を抱きしめるように腕を回す。
「……俺さ、よく分からないんだよ。俺がお前のこと、どう思ってるのか」
「は？」
霊幻さんが、俺のことを？
「逆にお前はさ、俺のことどう思ってんの？上司として尊敬してくれてるだけなんじゃねぇの？お前、俺と……そういうことシたいの？」
「いやだから何回好きだって言わせるんですか……。シたいですよ。そういう好きです。何度もあなたのＡＶで抜くくらい霊幻さんのこと性的に見てますよ」
ゆるりと腕をほどいて、信じられないと言いたげに霊幻さんが俺を見る。
「お前あのＡＶで抜けんの……？」
「……っ、最近はよくお世話になってます」
「信じらんねぇ……っ、お前ってヘテロじゃなかったっけ？」
「ヘテロってなんですか」
「正確には自分で調べて欲しいが、端的に言うと異性が性愛対象の人のことだ」
「ああ、ならほとんどヘテロだと思います。霊幻さんを好きになってからちょっと揺らいでますけど」
「揺らぐ」

「ゲイビデオも見るようになってきましたね、髪の明るい女優？抱かれてる男優？が出るやつを」
「……お前……」
「霊幻さんのビデオ、結構人気で借りれないことも多いんですよ。知ってました？アレ配信サイトに載ってないせいで、円盤がプレミアついちゃってるんですよ。俺も買おうとしたんですけど、流石に５万は出せなくて」
「ばかっ、買うなよ！分かった、もうＡＶの話はいい」
ずい、と呆れたように手を振る霊幻さんに近寄る。
「霊幻さんはどうですか」
「どう、って」
「俺とそういう関係になるの、嫌ですか」
また腕で頭を抱き込んでしまう。
「わかんない……」
はた、と気が付いて衝撃が走る。
「嫌、ってわけじゃないんですね？」
こくり、と頷く霊幻さんに、嬉しさがじわじわと上ってくる。
「芹沢といるのは楽しいよ？でもそれが恋愛感情なのかどうか、俺にはよく分からない」
だから、保留、か。
「……もしかして、なんですけど。これが正解なんじゃ？」
「え？」
「霊幻さん。……お友達から始めてみませんか」

こうして俺は、霊幻さんとお付き合いすることになった。

人知れずガッツポーズをする。何だか知らないが上手くいったので。

で、何度かデートをして。

新しい霊幻さんの一面を知って可愛いなあって惚れ直したり。

ちょっぴり頼もしいところを霊幻さんに見せられたり。

まだ霊幻さんから好きとは言って貰えないけれども、お付き合いを楽しんでいた。

それで浮かれてたのかもしれない。

※※※※※

霊障のせいでテナントの入っていない５階建てのビル。その日は俺と霊幻さんとで、なんてことはない除霊をしていた。
「おかしいな……」
異変に気が付いたのは霊幻さんだった。
「なんか、臭い気がする。芹沢、気をつけ」
「え？」
ガチャ、とドアを開けた瞬間に。
ビルの上半分が吹っ飛ぶ爆発が起きた。
とっさに自分達と、ビルの瓦礫が周囲に飛び散らないように二重にバリアを張る。
「大丈夫ですかっ、霊幻さん！？」
「ああ、大丈夫だ……！」
爆風で霊幻さんのコートと俺の上着がバタついている。
とにかく。
マズイことになったのは、分かった。

※

「老朽化も進んでたし、１００万で勘弁してくれるそうだ」
俺と霊幻さんは、ビル爆破事件の賠償金で、２人して頭を抱えていた。
「……銀行に掛け合ってみる」
霊幻さんがバタバタと外に出て行く。
零細企業である霊とか相談所に現金、いわゆるすぐ動かせる資金は存在しない。霊幻さんはそう言っていた。

何か、俺にできることはないだろうか。今回は俺に責任があると思うのに……。
「ダメだったわ……よし、森羅に金借りれないか電話してみる」
次は知り合いに電話しはじめる霊幻さん。それだけ打つ手を繰り出せるなんて、すごいなあ。俺も何かしなくちゃ。
と、感心してたら。
霊幻さんの携帯に電話がかかってくる。
表示を見て、険しい顔になって霊幻さんは電話を取った。
「はい、霊幻です。……またですか、プロデューサーさん」
ぴく、と耳が反応する。
『前作の評判めちゃくちゃ良くてさぁ、是非また出て欲しいんだけど、駄目かなぁ？』
「今度は本番有りでしょう？流石に抵抗があります」
『それなんだけどさ、良かったらカップル出演でどう？知り合いなら抵抗少なくならない？誰かいい男いないの？』
思わず霊幻さんの目が。
俺を見る。
「それは――」
「俺なら、いいですよ」
「え！？」
「霊幻さん、俺とＡＶ出ましょう」
そうだ。それで負債を何とかできるなら、俺には願ったり叶ったりだ。
霊幻さんとセックスできて。
お金も貰えるなんて。
「良く考えろよ！？一生残るんだぞ！！」
「霊幻さんと愛し合った記録が残るだけですよね？」
「……っ」
霊幻さんの顔が赤くなる。
『もしもーし？あれ、もしかして話進めていい感じ？なら霊幻ちゃん、彼氏さん連れて会社来てよ。打ち合わせしよ』
「……分かりました。また日時が決まったら連絡ください」
『あいよー』

ぷつ、と電話を切る。
「芹沢！お前本当に分かってんのか！？！？」
「今回のこと、俺は本当に責任を感じてるんです。霊幻さんが忠告してたのに、俺は無造作にドアを開けてしまった。なのに、俺は何もできなくて……ねえ霊幻さん。俺が申し出なかったら、もしかして自分だけＡＶに出るつもりだったんじゃないですか？」
ぎくり、と霊幻さんが顔を引き攣らせる。
「そんな、まさか」
「どこの誰とも分からない男優に抱かれるつもりだったんですか」
「だって、本当に」
霊幻さんが目を落とす。
「一生残るんだぞ……」
その姿にイラっとしてしまう。
「どうして、自分のことは大事にしてくれないんですか。そんなの霊幻さんもでしょう！？俺は嫌です。お付き合いしてる人が、別の男性に抱かれてる映像が一生残り続けるなんて、耐えられない」
がし、と霊幻さんの両の二の腕を掴む。
「俺をあなたの共犯者にしてください」
「芹沢……いいのか？」
「ええ」
「……ありがとう」
自然に２人とも目を閉じて。
ゆっくりと顔を近づける。
「あっ！ファーストキスも撮るからダメだ！」
ぐい、と口を手で塞がれて。

おあずけを食らった俺は、また今日も霊幻さんのＡＶで抜こう……と決心した。

※※※※※

「はーい、今日はわざわざ来てくれてありがとね〜」
この人、霊幻さんのＡＶでナレーションしてた人だ。

プロデューサーさんの第一印象はソレだった。スーツを着たプロデューサーさんは普通の会社員に見えて、ＡＶ会社のイメージとは違っていたけれど。
「今回はファーストキスと処女卒業を目玉に撮るから、初々しい感じでいってもらおうと思ってるんだけど、２人はどれぐらいの頻度でセックスしてるの？こなれ感出てると困るんだけどさ」
かあああ、と霊幻さんが手を握って真っ赤になる。
「……っ、プロデューサー、キスもセックスも、まだです……」
「え！？霊幻ちゃんまだ処女なの！？！？」
「はい……」
「ヤッター！！ありがとう神様！！」
プロデューサーさんが立ち上がってガッツポーズする。
「彼氏連れてきたから、てっきり……てことは、カメラでファーストキスも初エッチもやらせ無しで撮れるのね？」
「そうです」
「ありがと霊幻ちゃん〜♡ギャラに色付けておくからね♡♡それで、ギャラの話なんだけど。とりあえず前と同じ５０でどう？」
「……ありがとうございます」
「ん？訳アリ？覇気がないじゃん、霊幻ちゃん」
「いえ、そういうわけでは」
「そうだなぁ……契約書のさぁ、ここを譲歩してくれたら、１００でもいいよ」
「え！？」
「『配信サイトにアップロードしない』ってところ。……今は動画配信がメインになりつつあるからさぁ、そっちを許可してくれんなら、倍出せるよ」
霊幻さんが俺を見る。
「俺はかまいませんよ」
この席に座る時に腹は決めてきた。
「……分かりました。配信を許可します」
目の前で契約書に修正が入り、プロデューサーと霊幻さんのサインが二重線の上から書かれる。
「じゃあ次は彼氏さんのギャラだけど。大きなタトゥーとか傷跡と

か無い？」
「無いです」
「なら、ギャラは５万ね」
「……ごまん」
「あれ？知らなかった？男優は撮れ高がそんなに無いから、たいていギャラは安いよ。ウチは高い方。ＡＶ業界ってそういうところ」
……地味にショックを受けてしまった。５万でデジタルタトゥーかぁ……。
「芹沢、本当にいいのか？」
霊幻さんが心配そうに袖を引っ張ってくる。
そうだ。
値段じゃ無い。霊幻さんとセックスするのは俺。その方が大事だ。
「はい。かまいません」
「じゃ、決まりね。２人とも撮影まで食生活気を付けて、身体にできものとか出来るだけ作らないでね。コンシーラーテープで誤魔化すのも限界あるから。撮影１週間前になったらオナ禁して。でも霊幻ちゃんは前と同じくアナルは慣らしておいてね」
テキパキとプロデューサーさんは書類を片付ける。
「じゃ、よろしく」
そうして相談所の予定表には。
『遠方出張除霊』と書かれた、影山くんから訊かれても詳細を答えられない予定が追加された。

影山くんには悪いけど、俺は２人だけの秘密が、少し嬉しかった。

※※※※※

撮影当日。
「ボディーチェック入りまーす」
ジーンズにポロシャツ姿のスタッフさんたちが、慌ただしくスタジオをセットしている。ベッドがある相談所といった雰囲気だったが、いつも客用のソファーがある位置には大きなカメラが設置されていて、その周囲にはモニターや２台目、３台目のカメラがスタン

バイしていて、別世界だった。
Ｂスタジオと掲げられたそこは、ＡＶ会社があるビルの中にある、小さめのスタジオだった。
俺と霊幻さんはスタジオの隣りにある控え室で服を脱いでくるように言われる。
「霊幻新隆様……」
控え室には霊幻さんの名前がデカデカと書かれていて、俺の名前は無い。
中には仕出し弁当とお菓子、ジュースと水がテーブルに置いてあったが、全部霊幻さん用だった。
「おまえも食べていいからな」
霊幻さんが気を遣ってくれるが、俺は女優と男優の扱いの差を感じて新鮮だった。
「こんな世界なんですね……」
「今回のＡＶも、俺の知名度を使って撮ってるからな。勘弁してくれ」
「怒ってはいないので大丈夫ですよ。ただ新鮮なだけなんで」
２人して服を脱いでスタジオに戻る。
と。
「ちょっと、コレは……」
俺の性器を見て、現場がざわついてしまった。
「霊幻ちゃん、彼氏巨根だね」
「……言われて見ればそうですね」
プロデューサーが備品の新品のディルドやバイブをガサガサと探っている。
「霊幻ちゃん、悪いけど撮影前にほぐし追加ね。切れて血が出たりすると撮影中止になっちゃうから。このディルドで控え室でほぐして貰える？問題なくピストンできるまで」
太いディルドに霊幻さんは引き攣った顔を浮かべたが、分かりました、とパッケージされたディルドを受け取った。
「と、先にボディーチェックとドーランね」
２、３人の男性スタッフが真剣な顔をして身体の隅々までケガやできものが無いかチェックしていく。

「チェックオーケーです」
「こちらもチェックオーケーです。ドーラン入ります」
男性スタッフ達はクリームファンデーションみたいなものを取り出して、霊幻さんと俺の身体に塗り始めた。霊幻さんのは白さを際立たせるような色、俺のは少し浅黒い色のクリームだ。
「男優さんは女優さんの白さを際立たせるのが仕事ですから」
なるほど。スタッフさんが説明してくれた。
ドーランを全身まんべんなく塗って貰って、俺たちは一旦スタジオに戻る。
と、撮影用のスーツが準備されていたので、俺はそれを着た。
「あんま見ないで」
霊幻さんは控え室に設置されている仮眠用ベッドに座り、備え付けのローションを手に取ってうしろをほぐしはじめた。
いやいや。見るなっての無理でしょ。
「モザイクが無くて感動です……」
「何言ってんだよ、ばか」
あっという間に３本飲み込んだ後口に、霊幻さんはさっき渡された弾力のあるディルドを押し付ける。
「んっ……おっきい……」
ちょっと苦しそうだ。あとエロい。霊幻さんも１週間オナ禁してきたせいか、色気がダダ漏れだ。
「これは……時間かかるかも……」
「分かりました、プロデューサーさんに伝えてきます」
スタジオに向かって、プロデューサーさんにほぐしの状況を伝える。
「はいよ、了解。じゃあみんな集まって〜タイムスケジュール確認しまーす」
プロデューサーさんたちが真剣な顔で打ち合わせをはじめたので、控え室に戻る。
「はっ……はっ、は……」
霊幻さんはなんとかディルドの半分くらいを飲み込んだところだった。
「こんな、奥まで、挿れたことない……」

随分苦しそうだ。一旦抜いてローションを足してまた挿れなおしているが、また半分くらいで止まる。
「……芹沢、押し込んでもらってもいいか？自分だと、躊躇っちまって」
「はひ！？」
いいんですか！？
「わ、分かりました」
ローションでヌメるディルドをしっかり掴んで、ゆっくり出し入れしながら深さを増して行く。
「ぁっ、あ、あ、」
くぅう、エロい声だすのやめて欲しい。撮影前なのに暴発する。
「……全部入りました」
「じゃあ、ゆっくりピストンしてもらっていいか」
「……分かりました」
無修正の霊幻さんが。道具で目の前で犯されてる。刺激が強すぎてヤバい。
ディルドをギリギリまで引き抜き、また奥まで入れる。
最初は引っかかりがあったが、次第にスムーズにピストンできるようになった。
「あっ、あんっ、芹沢、もういい、いい、からっ」
甘い声に続けたくなるのをぐっと我慢して、ディルドを抜く。
「悪いけど、プロデューサーに服着ていいか聞いてもらいたい」
「分かりました」
下着の跡が残らないよう、ギリギリまで服は着ないと指示されていた。俺も下着は履いてない。
スタジオに行ってプロデューサーさんに確認すると、いまからインタビューだから、２人とも下着をつけずにスーツを着てくれと指示された。
それを霊幻さんに伝えて、スーツに着替えてスタジオに向かった。
「インタビュー開始しまーす。霊幻ちゃん、前と同じように、適当に編集点作ってね。芹沢ちゃん、霊幻ちゃんが黙ったら、基本黙るようにしてね」
頷く。スタジオには前と同じようにオフィスチェアが置かれてい

る。
ただし今回は２つだ。
カメラの真ん中に一つ、少し離して一つ。
インタビューは霊幻さんメインでやるから、こういう配置なんだろう。
「カメラチェック入りまーす」
「マイクチェック入りまーす」
「俳優さんスタンバイお願いしまーす」
霊幻さんと俺が椅子に座る。
「カンペチェックお願いしまーす。読めますかー？」
スケッチブックに『手を振って』と書いてあったので、俺と霊幻さんはひらひらと手を振った。
「空調切りまーす」
静かに動いていたエアコンが止められる。いよいよ撮影開始だ。
「撮影１０秒前！」
カウントダウンが始まって、カチンコが切られた。

「知ってる人は知ってるかな？お兄さん、お名前は？」
「……霊幻新隆」
「今日は恋人と出演してくれるんだよね？恋人は何て名前？」
「鈴木太郎」
ぺこり、と会釈する。
「霊幻センセはいつも何て呼んでるの？」
「……ダーリンとか、お前とか」
初耳だけど、そう言う設定でいくらしい。カンペに『ダーリン』とデカデカと書かれていた。
「いつから付き合ってるの？馴れ初めは？」
「３ヶ月前から。職場が同じなんだ」
「へぇ！ラッキーだったね、彼氏さん」
カンペに『返事しない』と書かれていたので黙っておく。
「ふたりともどこまで進んだの？手は繋いだ？」
「……３回目のデートで、繋いだ」
「なんか初々しいね（笑）彼氏のこと好き？」

「当然だろ」
「ちゃんと言って」
「……好き」
ぴしゃああん、とカミナリに打たれたみたいになった。初めて霊幻さんから好きって言われた。しかもこんなに可愛い不貞腐れ顔で。
「どれぐらい好き？」
「……たくさん」
ちょ、ちょっと待って欲しい。キャパオーバーしてる。俺、めちゃくちゃニヤけ顔になっちゃってるんで！！
「彼氏さんのどこが好き？」
「……優しいとこ」
優しく！！します！！
「２人はセックスは週何回？」
「……まだしてない」
「ええ！？じゃあキスは？」
「……それも、まだ」
霊幻さんの顔がほのかに赤くなる。
と、ぐわっとカメラが近寄ってきてビックリしてしまった。
「霊幻センセイまだ唇も処女なの！？嘘でしょ！？！？」
「……っ、処女、だよ」
カンペに『処女って言って』と書かれているのが見える。
「じゃあ今日、カメラの前で処女散らしちゃうんだね。綺麗に撮ってあげるから、またエロく喘いでね」
「……っ」
耳まで赤くなる霊幻さんを３台のカメラが舐め回すように撮る。
「じゃあセンセ、キスからいこっか」
どきん、と胸が跳ねたが。
「……分かった」
カンペに『カット』と書かれていたので、俺はそのまま待機した。
「はいカットー！」
カチンコが鳴らされる。
「編集点です。みんなちょっと身体ほぐしてー。あ、彼氏さん、カンペ見る時目だけ動かしてね。顔動かさないで。男優さんは顔をほ

とんど映さないから、それで不自然さ無くなるから」
「は、はいっ」
仕事だ。これは仕事の現場だ。俺は最初の霊幻さんとエッチなことができる興奮が収まってきて、どんどん緊張してきていた。
「はいファーストキスいきまーす。俳優さんスタンバイお願いしまーす。カメラチェック、マイクチェック」
再び現場がピリっとする。
「再開１０秒前、」
カウントダウンされ、カチンコが鳴らされる。
カンペに『彼氏立つ、肩を掴んで静止』と書かれていたので、その通りにする。
と、霊幻さんがスッと目を閉じてキス待ち顔になって。
『頭下げて』
カメラがその顔をアップで撮る。
『キスして』
しばらく経ってから、そうカンペが出る。
ごくり、と喉が鳴って。
俺は霊幻さんの顔を見ながら、そ、と唇を重ねた。
や、や、や、柔らかい……それに、暖かくて……し、幸せ……。
『ベロ吸い出して、ディープキス』
！？！？！？！？
俺はカンペに戸惑いながらも、ベロベロと霊幻さんの唇を舐める。
気が付いた霊幻さんがゆるゆると唇を開いてくれた。
舌で霊幻さんの口の中を探る。歯磨き粉の味がする。粘膜が擦れ合うのが気持ちいいが、ベロを吸い出さないと。
「ん……」
なんとか舌を絡め取ると、霊幻さんが鼻にかかった息を漏らして。
間近で聴いたそれの破壊力が凄すぎて、フリーズしそうになる。
「ぁ……んぅ……ん……」
霊幻さんがつたなく舌を絡み合わせてきてくれる。可愛い。声、エロい。けど、めちゃくちゃ寄ってきてるカメラがどうしても気になってしまう。
ぎこちない俺に気が付いて、霊幻さんがゆったりと目を開けて俺を

見る。
「……俺だけ見て」
血が沸騰したかと思った。俺は霊幻さんを引きずり立たせて、激しく口の中を犯す。完全にカメラのことが頭から追い出される。
腕の中の体温が燃えるようだ。すり合わせた粘膜から１つに溶けてく錯覚がする。
「ん！んあああっ、ふ、ぁ……っ」
苦しそうな霊幻さんの声が上がる。
トン、と拳で胸を叩かれたのが分かるが止まれない。
念願の。
霊幻さんだ。
霊幻さんの腰を支える手に霊幻さんの全体重がかかってくる。俺がキスから逃げる霊幻さんを追いかけて、のけぞらせてしまっているからだ。
「……はいストーップ！カットー！！」
止まれない。更に霊幻さんの舌を更に追おうとする俺に。
「い゛っ！？」
霊幻さんが、鎖骨の内側に両親指を入れてきたので、飛び上がった。
「……はい、お疲れ様」
まだポーッとしてる霊幻さんに少し恥ずかしそうにそう言われる。
「彼氏さんさぁ、霊幻ちゃんのこと、もしかしてめちゃくちゃ好き？」
「あ、はい」
にやにやしながら訊いてくるプロデューサーさんに応える。
「いいねぇ。エロい画が撮れそうだよ。その調子で霊幻ちゃんを喰い荒らしちゃって」
「喰い荒らす、だなんて」
思わず赤面する。
「ホラ、見てみなよ」
チェック映像をタブレットでプロデューサーさんが見せてくれて、本格的に赤面するハメになる。
戸惑って身体を引く霊幻さんにのしかかる様にして舌をむさぼる俺

の姿は、蹂躙、という言葉がぴったりで。そんな俺をそっと抱きしめる霊幻さんの手が、けなげだった。
「こんなに迫力ある映像が撮れるんですね……ＡＶって凄い」
正直、このデータ、欲しい。別カメラからの、酸欠になりながらもトロンとして愛撫に応えている霊幻さんも良かった。
「そういって貰えると監督冥利に尽きるよ。さ、次のシーンだけど、彼氏さんキスしながら霊幻ちゃんのスーツ脱がして、乳首をいじってね。乳首責めよりも、カメラに霊幻ちゃんの胸をみせるのをメインにして欲しいから、おっぱい揉みあげるのとかでいいから。霊幻ちゃん、乳首の開発ってしてる？」
「してないです」
「じゃあ無理に喘がなくていいから」
「はい」
「彼氏さん、霊幻ちゃん一回脱がして見てくれる？」
「へ！？」
スタッフさん達は細々とした別の仕事をし始めた。
「は、はい」
俺はどきどきしながら霊幻さんの服に手を伸ばす。霊幻さんのグレースーツに触れるのは、緊張も興奮もする。
……ネクタイが外せない。
「ここ指入れて、下ろして」
霊幻さんが誘導してくれると、しゅるりとネクタイを外せた。
手が震える。スーツのボタンを外すだけなのに、ひどく時間がかかる。ボタンを外す度に、霊幻さんの身体のラインが見えてくるのも良くない。
「くぅっ」
尊さに思わず声を漏らすと、プロデューサーさんが失笑した。
「気持ちは分かるけど、頑張ってね」
何とかスーツの前をくつろげる。次はシャツだ。１つのボタンを外す度に、白い肌が見えていって。
「……すっげー汗」
ふ、と柔らかく笑って霊幻さんが俺の汗を指で拭ってくれたりするから、きゅーんと胸が痛くなったりして。

「は、外せました」
「じゃ霊幻ちゃん、もっかい着て」
霊幻さんが無表情にシャツのボタンを留め、スーツを着てネクタイを締める。
「はいもう一回脱がせて。もう少し早く脱がせられないと、尺が足りなくなるから」
……練習だった。俺も流石に2回目には慣れて、テキパキと脱がせられた。それでも手が震える。
「……ま、こんなもんかな。霊幻ちゃん、また着て。あんまり手際良くてもヤラセ感出ちゃうからね。はいスタッフ復帰ー！」
スタッフさん達が持ち場に戻る。
「汗！」
スタッフさんの1人が俺の汗を雑に拭い、ドーランを直していく。
「スタッフスタンバイ！俳優さん達はちょっとキスして、顔作って」
そう言われて、戸惑いながらも霊幻さんに口付ける。
「んっ……」
すぐ霊幻さんが赤くなったので、カチンコが鳴った。
くちゅりと水音を響かせながら。
俺ははたと気がつく。

とうとう、霊幻さんの素肌に触れる。

どっ、と心拍数が跳ね上がった。